

北京での研修を通して

私は異文化交流Ⅱという授業に参加し、9月13日から17日の約5日間北京にて研修を行った。私にとっては初めての海外滞在であったため、不安も多くあったが、結果から言うとこの5日間はこれまでの約2年半の大学生活の中で最も充実して、有意義な時間であったと感じている。

まず、事前学習では班員全員と初対面で、さらに調査のテーマである農村ツーリズムも、自分の専攻の中国史とはほぼ関係がなかったため、友達も増え、多くの新たな知識を得ることができた。初めは農村ツーリズムという言葉すら聞いたことがなかったが、文献を読んだり、浜田市の古民家での調査で、農村ツーリズムを実施している方々の声を直接お聞きしたりして、現在の日本の課題は何なのか、何が原因で、どうすれば解決できるのかなど、考えるようになった。



中国人民大学での発表では、自分たちよりも、人民大学の学生さんの発表の方が、伝えたい内容をうまくまとめて簡潔に話せており、全体としてわかりやすかったなど、発表の仕方において参考にすべき点が多く見つかったので、今後の学習に生かしていきたいと思う。

発表の内容については、中国人と日本人の考え方の違いに驚かされる部分が多かった。1番大きかったのは、農村ツーリズムの扱いについてである。日本では、農村のありのままの姿、自然や人とのふれあいなどを重視し、利益を目的としていないが、中国では、利益を目的としており、ほぼ観光と変わらないようなものとなっている。その原因は、人口の多さや国土の広大さなどからくる農村と都市部の経済的格差、差別感など、色々考えられるが、日本ではあまり考えられない。

私は、日本で調査をしている時は、利益を目的としないことや、人と人とのふれあいを重視することが当たり前のように思っていた。しかし、それが当たり前でない、隣の国なのにこうも違うのか、と衝撃を受け、さらに調べていきたいと思ったため、古代中国史を研究していたが、先日、近現代史に変更したところである。特に現代中国で問題となっている貧富の格差や貧困層に対する差別について研究していく予定である。

このように、高校時代から古代中国史を専攻したいと思い、大学でも2年半学習してきた私であるが、この5日間の研修は、あっさり研究テーマを変えてしまうほどに衝撃的であり、充実していたものであった。日本人にとっての当たり前が、当たり前でない。それは世界中どの国に行っても感じるであろう。今回の研修で長城や天安門広場なども訪れたが、まだまだ知らない部分が多い。中国をはじめとして、ほかの国々のことをもっと勉強したい、知りたい、と強く思った5日間であった。

